

皆さんは、「勉強」と「研究」の違いって、なんだと思いますか？これは、あくまでも私個人の考えですが、人類がすでに解き明かした物事を学習するのが勉強。それに対して、人類がまだ解明していないことを追求するのが研究ではないかと考えています。そして、1月の学校だより番外編のタイトルは、「研究のススメ」です。ここから先の話は、クスッと笑いながら読んでもらいたいと思います。

さて、この話は、いつものように正門であいさつ運動をしていた時の話です。そして、私は大発見をしました。と言うか、したと思っていました。一体何の話かと言うと、目の前の飲食店の看板の文字が動いたのです。看板は、赤い背景に黒い文字で店名が書かれている普通の看板です。その看板の文字が動いて見えたのです。具体的に言えば私が首を右に向けると、文字は左に動きます。そして、左を向けば、文字は右に動くのです。いつも見ていた看板に、そんな特別な仕掛けがあったのかと、驚きました。そこで、さっそく登校してきた生徒に言いました。「ねえ、知ってた？あの看板の文字って、動くんだよ。」校長先生に突然声を掛けられた生徒は、びっくりしながら、それでもちゃんと話を聞いてくれます。嬉しそうに大発見を説明する私。生徒も私と一緒に首を動かしてくれます。そして、ちょっと怪訝（けげん）そうに、こう言うのです。「校長先生、動いてませんよ。」そんなはずはない。確かに動いて見える。次は出勤してきた先生に声をかけ、同じ説明をする。しかし、結果は同じ。動いて見えたのは、私だけだったのです……。すると、考えられるのは、私自身に何か問題があるのではないかとということです。目は、脳に直結した臓器です。また、絶えず外気に触れていることから問題の発生しやすい臓器でもあります。心配になった私は、他の物の見え方に異常がないかと目を凝らしました。しかし、その看板以外の看板も他の物も普通に見えますし、動いたりしません。どうやら、病気ではないようです。そうすると、他に原因があるはずです。何しろ、私には動いて見えるのですから……。

続いて、看板をよく観察しました。ただのプラスチック製の看板です。しいて言えば、少しへこんでいるように見えます。そこで、一つの仮説にたどり着きます。もしかしたら、このへこみが凹面鏡のように働いて、文字が動いたように錯覚したのではないかと。人の顔を彫り込んだ像は、見る人が動いても、ずっとこっちを見つめているように見えるといった、錯覚を用いたトリックアートを見たことがあります。看板がへこんでいたせいで、トリックアートと同じ現象が起きていたのではないかと。しかし、そうならば他の人にも同じような錯覚が見えるはず。私だけに見える錯覚というのはおかしい……。

そこで、「私にだけ見える。」というポイントに焦点をあてて考えてみました。見える人と見えない人との間に何か違いがあるはず。もう一度、何が違うのかを考えてみました。すると、正門で話しかけた生徒も先生も、メガネをかけていなかったことを思い出しました。私のかけているメガネのレンズの湾曲と看板の湾曲が関係あるのではないかと。メガネが怪しい！新たな仮説を立てました。

スマホのカメラを起動し、メガネ越しに看板を映してみます。レンズと看板の湾曲の関係ならカメラを動かすと、文字が動くのではないかと考えたのです。しかし、何も起こりません。文字は動かない。検証実験は失敗です。でも、それは当然のことだったのです。そもそも目の錯覚は、あくまでも脳が引き起こす現象です。ようは、脳が勘違いしているわけですから、機械であるカメラが勘違いすることはなく、動くはずなかったのです。そこで、最後の手段に出ることにしました。私のメガネを使って、他の人が看板を見てどうなるかを確かめるしかない！私は学校にやってきたばかりの先生に声を掛け、看板を見てもらいました。すると、その先生は言いました。「動いてます！」これで、すべての謎は解けました。疑問に思った日から1か月かかりました。でも、スッキリしました。まさに、腑に落ちたというやつです。

「研究」や「探求」といった物事を突き詰める活動は、まずは「違い」や「変化」に気づくことから始まります。そして、そのもの自体に興味関心を持ち、謎を解き明かしたいという意欲が大切です。なぜそうなったのかといった理由を考え、仮説を立て、実証し、その結果を考察していくことで研究は深まります。2022年、南中学校では、こういった探究活動、主体的・対話的で深い学びを大切にしていきたいと考えています。南中学校に若き研究者がいっぱい育ってくれたらいいなと願っています。